

漁海況年報

平成29年1月1日～12月31日

静岡県水産技術研究所
(電話 054-627-1815)

静岡県水産技術研究所伊豆分場
(電話 0558-22-0835)

【黒潮流路】

図1に黒潮流型の区分を、表1に近年の流型の経過を示した。また、図2には平成29年1～12月の各月前半、後半の代表的な黒潮流路を示した。

平成29年の黒潮流路は、1月前半はB型であったが小蛇行が東進してC型となり、その後新たな小蛇行の東進により3月前半にB型、3月後半にはC型となり、4月後半までC型で推移した。小蛇行は更に東進して5月前半にD型となった。5月後半には新たな小蛇行の東進によりW字状(B型とD型が同時に存在)になり、6月後半には先行した小蛇行が日本東海上に抜けてB型となった。その後小蛇行の東進に伴い7月前半にC型となり8月前半までC型で推移した。8月下旬から、潮岬で離岸し東海沖で32°N以南にまで離岸して流れる大蛇行となった。その後、遠州灘沖で南下後伊豆諸島の西側で北上して八丈島付近を東に抜けて伊豆諸島の東側で南下後北上する流路となった後、9月後半に伊豆諸島東側の小蛇行が日本東海上に抜け黒潮が房総半島に接岸してA型となった。その後12月後半までA型が継続した。

小蛇行により流路が変化した1月後半には伊豆諸島北部海域から駿河湾や相模湾へ向かう暖水波及が見られた。10月後半から11月前半には伊豆諸島海域から遠州灘沖を通過して熊野灘に向かう内側反流が見られた。

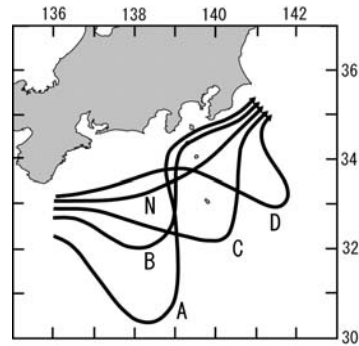


図1 黒潮流型の区分
(海上保安庁海洋情報部より)

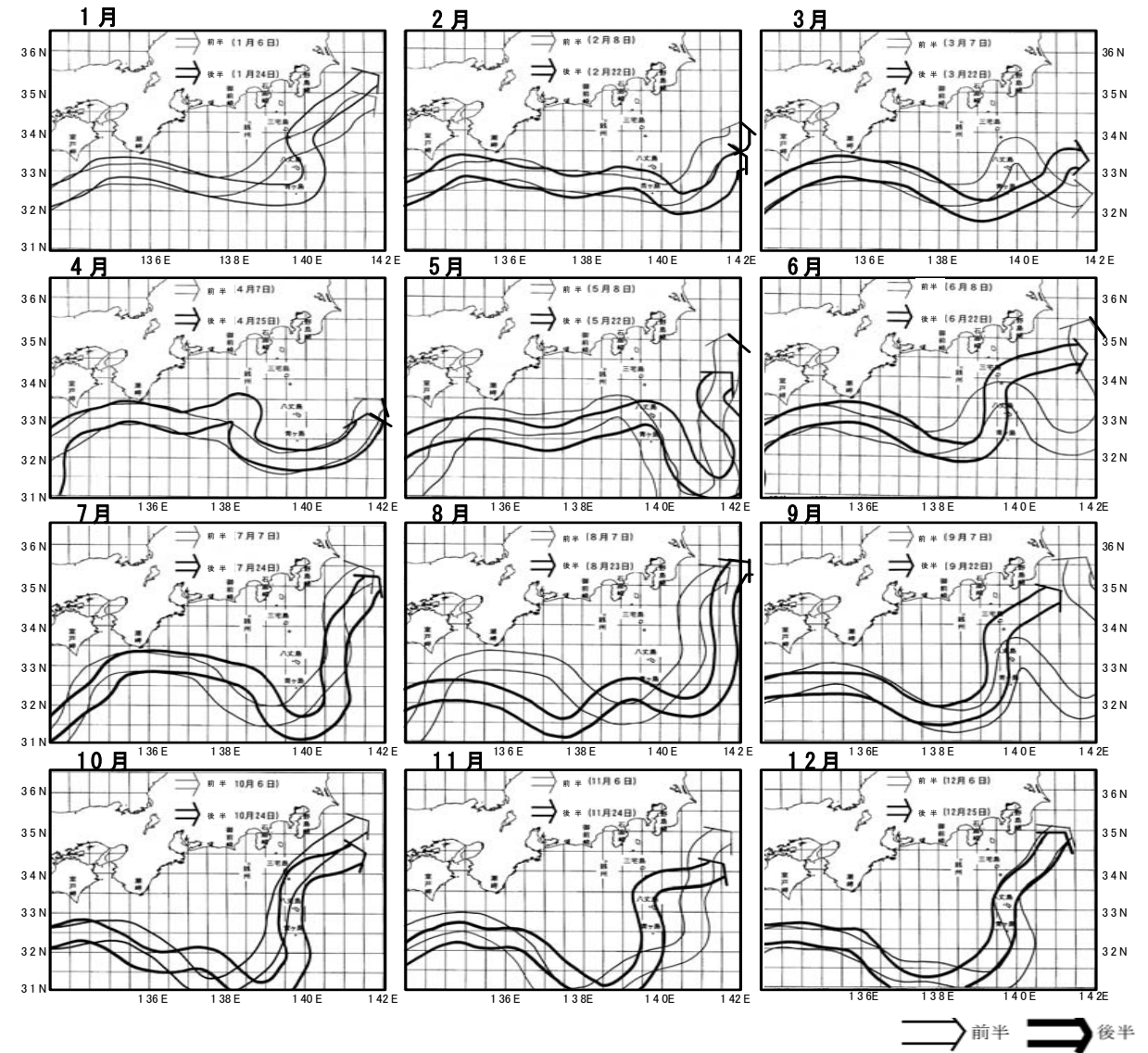


図2 黒潮流軸の変動(関東・東海海況速報より)

表1 黒潮流型一覧表 資料：海洋速報(海上保安庁)、関東・東海海況速報)

年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
15年	N	N	N	N	D	NW	WN	B	BC	D	N	N
16年	N	N	N	N	N	N	N	NA	A	A	A	A
17年	A	A	A	A	A	A	A	C	C	C	D	DN
18年	N	N	N	NB	C	CWC	CN	N	N	N	N	N
19年	N	BC	D	B	B	C	C	C	C	C	N	N
20年	C	C	N	N	N	N	B	B	C	C	C	CD
21年	C	C	C	C	C	C	CW	WB	C	C	C	C
22年	D	DN	N	BC	N	NW	WB	C	CD	D	N	N
23年	N	N	N	B	B	CW	C	DW	N	BC	C	D
24年	N	N	N	B	C	C	CD	N	B	C	C	D
25年	C	ND	D	DN	N	N	N	NB	B	BC	C	C
26年	C	C	C	C	C	WB	C	BC	N	N	BC	N
27年	N	BC	C	W	WB	C	C	C	CD	DC	D	N
28年	C	D	BN	DW	NB	NB	BC	C	C	C	C	CW
29年	B	BC	C	CW	B	C	C	CD	DW	W	B	C

*静岡県水産技術研究所一部改変

〔県下沿岸域〕

図3に平成29年1～12月の旬別の沿岸水温の変化を示した。1月は伊東、稲取、下田、雲見「平年並」～「高め」、沼津、焼津「やや低め」～「平年並」であった。2月は伊東、稲取、下田「やや高め」～「高め」、雲見、沼津、焼津「平年並」～「やや高め」であった。3～4月は伊東、稲取、下田で「平年並」～「やや高め」、雲見、沼津、焼津「やや低め」～「平年並」であった。5～6月は、稲取「平年並」～「やや高め」、伊東、下田、雲見、沼津「やや低め」～「平年並」、焼津「やや低め」～「やや高め」であった。7月に水温が高い傾向となり、7～9月は全域で「平年並」～「高め」、10月は伊東、稲取、下田、雲見、沼津「平年並」～「やや高め」、焼津「やや低め」～「やや高め」であった。11月後半以降、水温が低い傾向となり、11月は全域で「低め」～「高め」、12月は全域で「やや低め」～「平年並」であった。

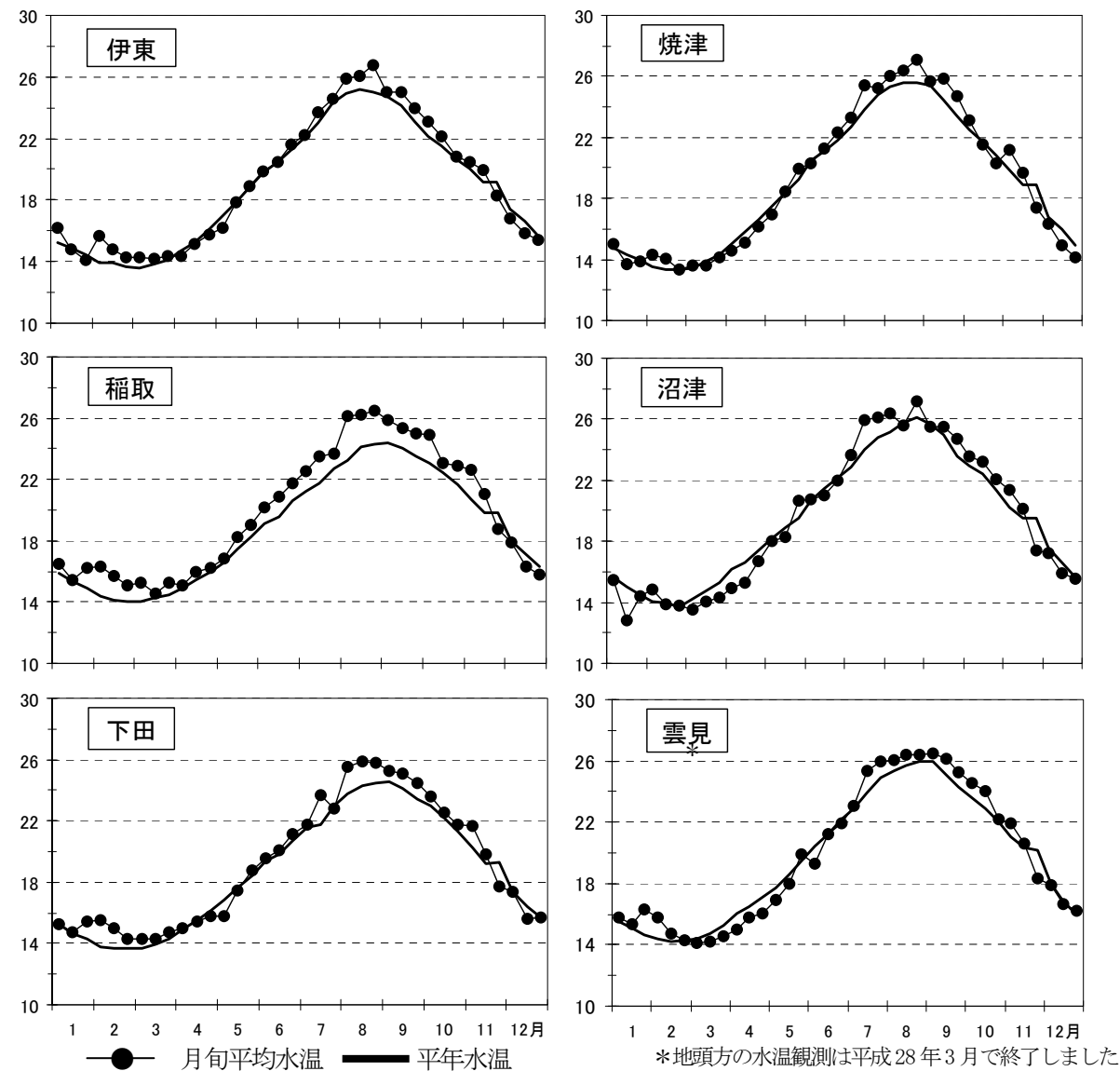


図3 平成29年1～12月の旬別沿岸水温の変化（縦軸は水温、横軸は月を示す）

〔サバたもすくい棒受網〕

1 たもすくい（平成29年1～6月）

静岡県船のたもすくいの操業は、2月上旬に漁場水温16℃前後の三本周辺海域で始まった（マサバ1夜1人626kg）。2月中下旬も主漁場は三本・三宅島周辺海域に形成され、盛漁となる時期もあったが、暖水波及が弱まったことや冷水域の影響により漁場水温は14～17℃台と変動し、漁況は安定しなかった（マサバ1夜1人804～2,672kg）。3月上中旬は、漁場水温が15℃前後の銭洲海域で漁場が形成されたが、漁況は低調で散発的であった（マサバ1夜1人5～564kg）。マサバ主体の操業は低調で推移したため、3月下旬以降静岡県船は棒受網に転換した。（たもすくい出漁日数21日）

静岡県船の漁期を通したマサバCPUE（1夜1隻）は10.4トンで前年16.0トンを大きく下回った。平成29年1～6月の一都三県主要7港^{*1}への水揚量は、マサバが1,643トンで前年（4,011トン）の41%、ゴマサバが321トンで前年（1,081トン）の30%であった。

*1 千葉県：千倉・富浦、神奈川県：三崎・長井、静岡県：伊東・沼津・小川の7港

2 棒受網（平成29年1～12月）

棒受網による操業は1月中旬にゴマサバ主体の操業で始まり、漁場は三宅島周辺海域の三本に形成された。2月から3月中旬は全船がたもすくい操業に転向した。棒受網再開後、漁場は期間を通じて主に三宅海域と銭洲周辺海域に形成された。9月以降、黒潮流路が安定せず、漁場水温も安定しなかったため漁況は低調であった。

平成29年の静岡県主要4港^{*2}における水揚量は、マサバは31.6トンで前年（1.9トン）を上回り、ゴマサバは5,294トンで前年（4,877トン）並であった。また、ゴマサバCPUE（1夜1隻）は20.4トンで、前年（20.3トン）、前々年（21.4トン）並であった。

年齢別漁獲尾数の割合は、0歳魚（2017年級群）が0.4%、1歳魚（2016年級群）が44.1%、2歳魚（2015年級群）が11.6%、3歳魚（2014年級群）が30.8%、4歳（2013年級群）以上が13.2%であり、1歳魚と3歳魚が漁獲の主体であった。

*2 伊東・静浦・沼津・小川の4港

3 小川魚市場におけるサバ類単価（表2）

平成29年の小川魚市場における棒受網（一部たもすくいも含む）のサバ類月別単価は、マサバが72～279円/kg（1～6月）、ゴマサバが79～135円/kgであった。マサバについて近年水揚量は増加傾向にあるが、30cm未満の小型魚の割合が多く、価格は低調に推移している。ゴマサバについては、水揚量の減少に伴い価格は好調に推移している。しかし、期後半は沖留めによる操業を行ったため、水揚量は少ないが、価格は近年の中では低調であった。

表2 小川港（焼津市）における棒受網・たもすくいのサバ類月別単価

単位：円/kg

年	魚種	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
2013年	マサバ	485	182	93	132	93	-	-	-	-	-	-	-
	ゴマサバ	107	80	72	78	75	82	82	82	75	76	83	91
2014年	マサバ	193	301	229	215	187	165	-	-	-	-	-	-
	ゴマサバ	101	170	110	105	92	85	91	91	94	73	83	116
2015年	マサバ	409	295	119	106	83	108	-	-	-	-	-	-
	ゴマサバ	120	198	111	88	78	88	87	169	109	106	94	83
2016年	マサバ	203	134	142	105	228	-	324	-	-	-	-	183
	ゴマサバ	92	114	119	101	98	92	87	82	82	84	92	93
2017年	マサバ	279	145	158	108	72	204	-	-	-	-	-	-
	ゴマサバ	111	113	117	90	91	93	79	92	79	85	89	135

2 漁況（漁場形成と魚体）

御前崎港での魚体測定及び漁場聞き取り調査から、漁況はおおむね次のとおり推移した。

- 1月 例年、近海竿釣り船によるカツオの水揚げが始まるが、本年は水揚げがなかった。1月に水揚げがないのは平成2年以降では平成26年に次いで2回目となる。
- 2月 近海竿釣り船の水揚げが始まり、19°～24°N、139°～150°Eの南方や中南海域で、特大（尾叉長71～73cmモード）カツオを主体に水揚げした。
- 3月 近海竿釣り船が22°～23°N、145°～148°Eの海域で、特特大（尾叉長74～76cmモード）カツオを主体に水揚げした。
- 4月 上・中旬は、近海竿釣り船が24°～25°N、140°～142°Eの海域で、特特大（尾叉長80～83cmモード）カツオを主体に水揚げした。下旬からは沿岸竿釣り船による今漁期の水揚げが始まり、30°～33°N、138°～140°Eの海域で、小（尾叉長45～47cmモード）カツオを主体に水揚げした。
- 5月 近海・沿岸竿釣り船が31°～33°N、137°～141°Eの海域で、小（尾叉長43～45cmモード）カツオを主体に水揚げした。
- 6月 近海・沿岸竿釣り船が30°～34°N、138°～139°Eの海域で、小（尾叉長45～47cmモード）カツオを主体に水揚げした。
- 7月 近海・沿岸竿釣り船が33°～34°N、138°～139°Eの伊豆諸島周辺や駿河湾沖などを中心とした海域で、小（尾叉長46～48cmモード）カツオを主体に水揚げした。
- 8月 近海竿釣り船の主漁場が三陸沖へと変わり御前崎港への水揚げはなかった。沿岸竿釣り船が31°～35°N、138°～142°Eの伊豆諸島周辺や駿河湾沖などを中心とした海域で、極小（尾叉長39～40cmモード）カツオを主体に水揚げした。
- 9月 沿岸竿釣り船が34°～35°N、138°～139°Eの駿河湾沖や遠州灘沖などを中心とした海域で、極小（尾叉長38～40cmモード）カツオを主体に水揚げした。
- 10月 沿岸竿釣り船が伊豆諸島周辺海域などを中心とした海域で、大(5.0～5.9kg)、特大(7.0～8.9kg)、大中(4.0～4.9kg)カツオを水揚げした(魚体測定データ無し)。また、中・下旬は台風などの影響により沿岸竿釣り船の出漁がなく水揚げがなかった。
- 11月 三陸沖漁場から帰ってきた近海竿釣り船が23°～27°N、140°～142°Eの中南方海域で、極小(尾叉長40～42cmモード)カツオを主体に水揚げし、同船の今漁期最後の水揚げとなった。また、沿岸竿釣り船が34°～35°N、139°～140°Eの伊豆諸島北部周辺などの海域で、大(尾叉長58～62cmモード)カツオを主体に水揚げした。
- 12月 沿岸竿釣り船が31°～32°N、139°～140°Eの伊豆諸島南部周辺などの海域で、極小(尾叉長40～41cmモード)カツオを主体に水揚げし、同船の今漁期最後の水揚げとなった。

【サクラエビ船曳網】

春漁は3月23日夜～6月4日夜に操業が行われた。出漁日数は25日、漁獲量は811トンで、漁場は主に富士市沖から富士川沖及び焼津沖に形成された(前年の出漁日数は22日、漁獲量は810トン)。漁獲されたサクラエビは、ほとんどが前年(H28年)生まれのサクラエビで平均体長は34.8mmであった。

秋漁は11月5日夜～12月24日夜に操業が行われた。出漁日数は20日、漁獲量は321トンで、漁場は主に焼津沖～相良沖に形成された(前年の出漁日数は17日、漁獲量は404トン)。漁獲されたサクラエビは、平均体長32.1mmの0歳エビ(H29年生まれ)と平均体長39.0mmの1歳エビ(H28年生まれ)の2群で構成されたがほとんどが1歳エビであった。

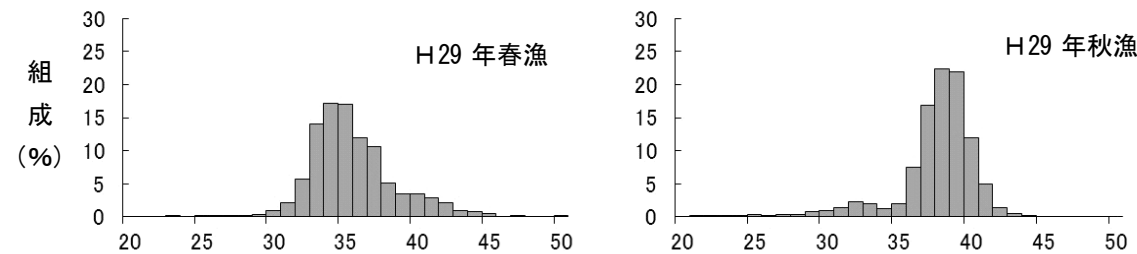


図4 平成29年春漁、秋漁で漁獲されたサクラエビの体長組成

【竿釣り近海カツオ】

1 水揚量と魚価

平成29年の静岡県主要5港（沼津、清水、焼津、小川、御前崎）における近海・沿岸竿釣り船の水揚量は888トンで、前年の936トンを下回り、過去5か年平均（1,280トン）の69%であった。現行の統計（平成2年以降の集計）では最も少ない水揚量となった。

魚価は404円/kgで前年（476円/kg）及び過去5か年平均（406円/kg）を上回った。

表3 平成29年近海・沿岸釣り船のカツオ水揚量等(県内主要5港)

年月	水揚量(トン)	水揚隻数	水揚/隻(トン)	平均単価(円/kg)	主漁場と魚体 ()内は体長モード、単位はcm
29年1月	0	0	—	—	—
2月	46	4	11.4	353	南方、中南方海域(71~73)
3月	66	4	16.6	288	中南方海域(74~76)
4月	100	11	9.1	425	中南方海域(80~83)、伊豆諸島周辺(45~47)
5月	146	35	4.2	424	伊豆諸島周辺(43~45)
6月	115	32	3.6	404	伊豆諸島周辺、(45~47)
7月	167	66	2.5	358	伊豆諸島周辺、駿河湾沖(46~48)
8月	95	41	2.3	406	伊豆諸島周辺、駿河湾沖(39~40)
9月	54	31	1.7	289	駿河湾沖、遠州灘沖(38~40)
10月	24	14	1.7	528	伊豆諸島周辺(測定データ無し)
11月	76	37	2.0	606	中南方海域(40~42)、伊豆諸島北部(58~62)
12月	0.4	2	0.2	525	伊豆諸島南部(40~41)
29年計	888	277	3.2	476	
28年計	936	336	2.8	359	
5カ年平均	1,280	328	4.2	389	平成24~28年の平均

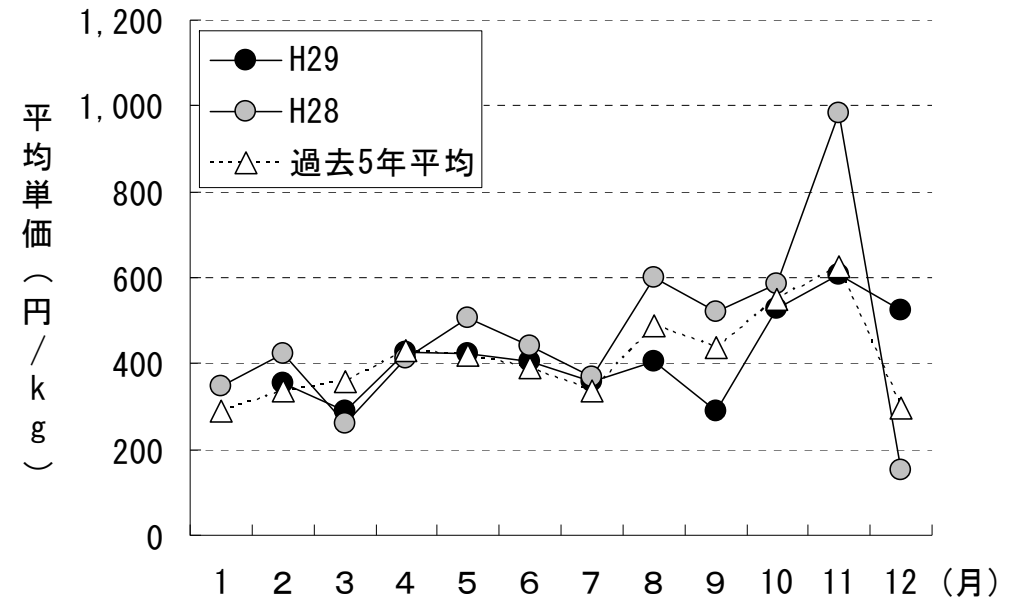


図6 近海・沿岸釣りカツオの平均単価の推移

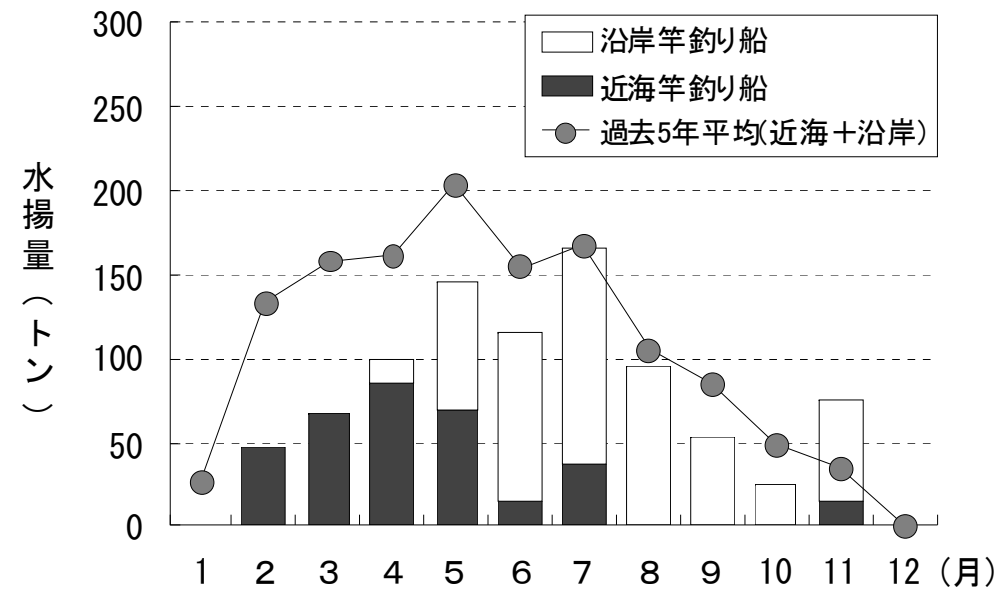


図5 近海・沿岸釣りカツオの月別水揚量の推移

[まき網(いわし類)]

1 マイワシ

平成29年における静浦漁港の総水揚量は0.5トンであった(前年1.8トン、平年*0.8トン)。沼津港の総水揚量は、6,187.2トンで、前年(3,453.2トン)の17.9倍、平年(2,012.1トン)の30.7倍であった。月別では6月(1,213.9トン)、10月(1,776.0トン)にまとまった水揚げがあった。小川漁港の総水揚量は、2,621.1トンで、前年(1,049.3トン)の25.0倍、平年(840.7トン)の31.2倍であった。月別では2月(838.7トン)、3月(564.5トン)にまとまった水揚げがあった。伊東港の総水揚量は、722.1トンで、前年(746.7トン)の97%、平年(376.6トン)の19.2倍であった。月別では、4月(233.8トン)にまとまった水揚げがあった。

2 カタクチイワシ

平成29年における静浦漁港の水揚げはなかった(前年8.1トン、平年87.1トン)。沼津港の総水揚量は367.7トンで、前年(72.3トン)の50.9倍、平年(64.1トン)の57.4倍であった。月別では6月(208.2トン)、7月(119.8トン)にまとまった水揚げがあった。伊東港の総水揚量は13.2トンで、前年(226.9トン)の6%、平年(427.8トン)の3%であった。

*平年：過去5カ年(平成23~27年)平均

[シラス船曳網]

○平成29年シラス漁は3月22日から始まった。平成29年3月～平成30年1月の主要6港（静岡、吉田、御前崎、遠州、舞阪、新居）における総水揚量は4,557トンで、前年(7,659トン)の60%、平年*(7,768トン)の59%であった。また、総水揚金額は2,893,036千円で、前年(4,598,645千円)の63%、平年(4,380,512千円)の66%であった。平均単価は635円/kgで、前年(600円/kg)及び平年(564円/kg)の1.1倍であった。

○今漁期は、3月の水揚量は前年の30%、平年の63%、4月も前年の49%、平年の73%と、前年及び平年を下回る漁模様であった。5月は2,568トンの水揚げがあり、前年の1.7倍、平年の1.4倍と漁況は好転し、今漁期における最大のピークとなった。6月に水揚量は減少し、不漁であった前年の2.1倍と上回ったが、平年の56%であった。7～9月の水揚量は低調に推移し、前年及び平年を下回ったが、夏季に水揚量が少ないのは近年に共通の傾向である。例年では10月以降に水揚量が回復し、春季の水揚量のピークに次ぐ、二番のピークとなるが、今漁期は水揚量が増加せず、10月は前年の11%、平年の15%、11月は前年の10%、平年の11%と低調に推移した。12月に入ると水揚量はやや回復したが、前年の49%、平年の32%、1月は前年の12%、平年の21%であった。

○シラスの魚種別の漁況は、3、4月はマイワシシラス（以下、マシラス）がほぼ100%を占める特徴的な漁況であった。カタクチイワシのシラスは主に5月以降に混ざるようになり、6月以降はシラス水揚の主体となった。また、12月以降に再びマシラスが混ざるようになった。マシラスの水揚割合は、親のマイワシ資源の増加により近年増加傾向にあり、今後も増加すると考えられる。しかし、平成29年と平成28年で親の資源量は大きく変わらないにもかかわらず、マシラス組成は平成29年がほぼ100%、平成28年が26%と大きく異なった。これは静岡県内の沖合に極めて多くのマイワシ親魚が来遊し産卵した一方で、カタクチイワシ親魚の成熟・産卵が抑制されたためだと考えられる。なお、ウルメイワシのシラスは、3～6月と12～翌年1月にわずかに混じる程度であった。

*平年：過去5ヵ年（平成24～28年）平均

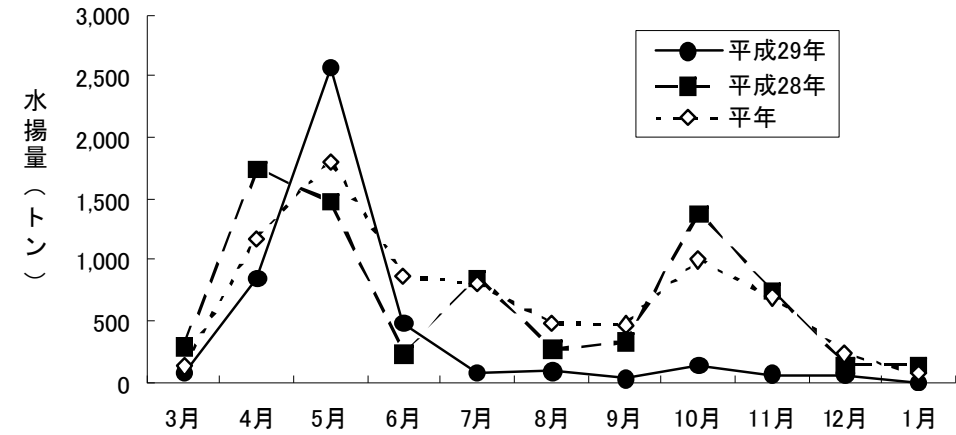


図7 平成29年漁期 主要6港シラス水揚量の推移

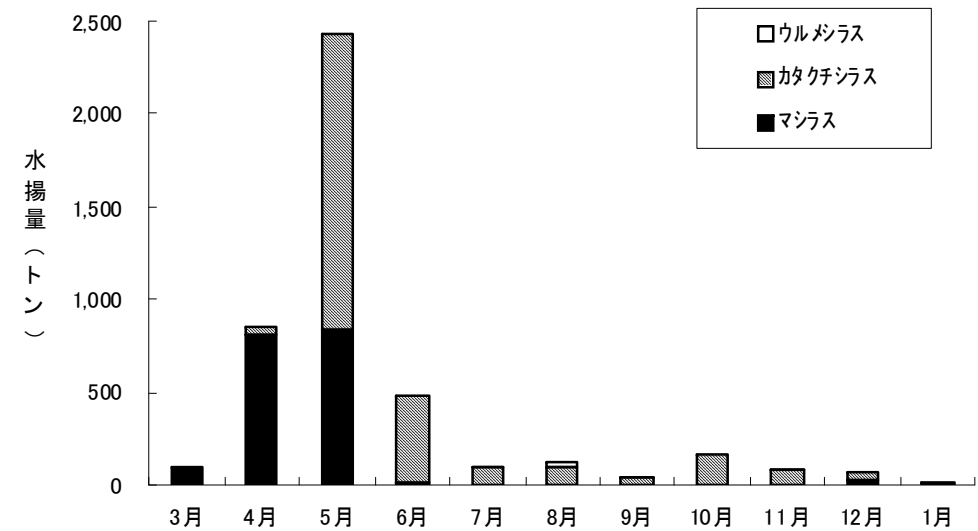


図8 平成29年漁期 主要6港シラスの魚種別水揚量の推移

【定置網】

平成29年の伊豆半島東岸大型定置網7か統（伊豆山、古網、川奈、富戸、赤沢、北川、谷津）の漁獲量は2,860トンで、前年漁獲量3,390トンの84%、平年値（昭和57年～平成28年平均）4,084トンの70%であった。月別漁獲量は3月と7月を除き平年を下回った（図9）。

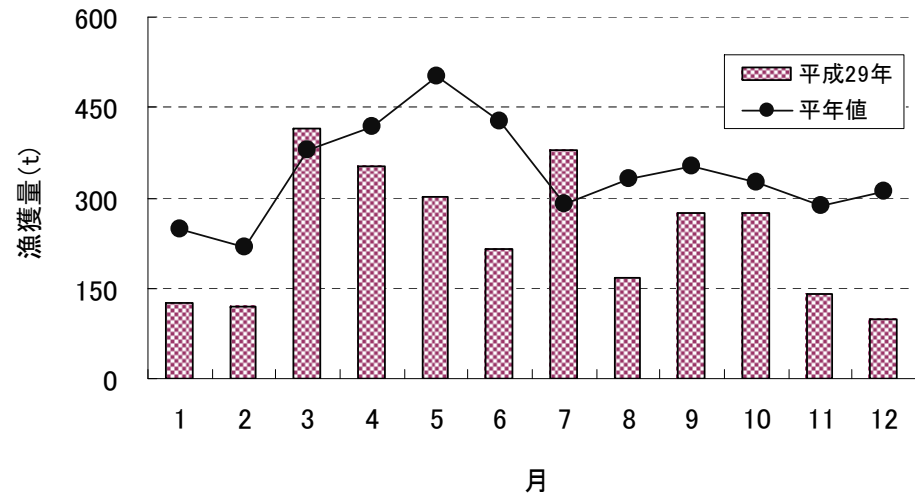


図9 月別漁獲量の推移

漁場別漁獲量は、谷津漁場を除き前年を下回った。なお、漁獲量の多かった漁場は、順に北川（さば類、カタクチイワシ、ブリ主体）、古網（カタクチイワシ、ブリ、さば類主体）、川奈（ブリ、さば類、オアカムロ主体）漁場であった（図10）。

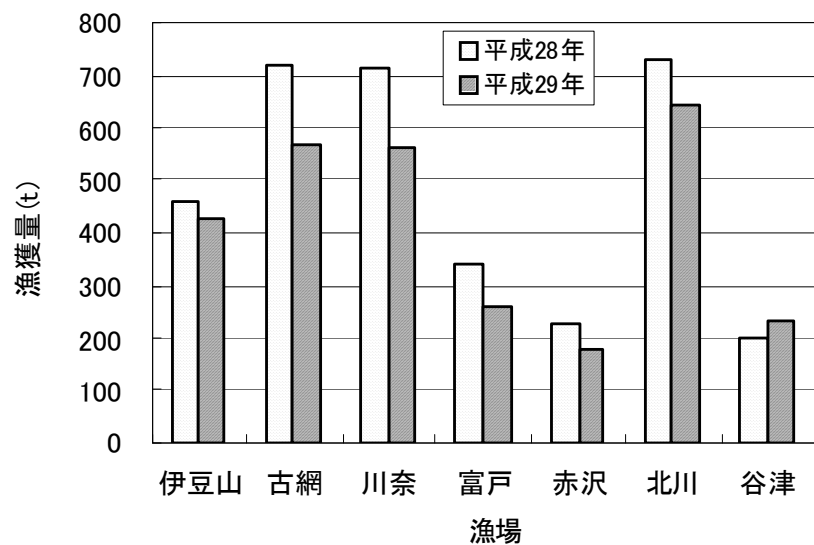


図10 漁場別漁獲量

多獲された魚種（上位10種）の漁獲量は表4のとおりで、ブリ、カタクチイワシ、ヤマトカマス、イサキ、オアカムロは平年並み～平年を上回ったが、さば類、マイワシ、マアジ、マルソウダ、スルメイカは平年を下回った。

さば類は713トンで、前年比60%、平年比70%と、前年、平年を下回った。さば類のうち、ゴマサバは632トンで、前年比60%、平年比67%と前年、平年を下回った。一方、マサバはゴマサバに混じる程度であったが、81.5トンで前年比1.2倍、平年比1.4倍と前年、平年を上回った。

ブリは627トンで、前年比96%、平年比2.5倍と、平年の2倍以上の漁獲があった。銘柄ぶり、わらさ主体で、ぶりは204トンで前年比1.1倍、平年比2.1倍、わらさは284トンで前年比68%、平年比2.9倍と、いずれも平年を上回った。また、わかしについても前年比3.2倍、平年比5.1倍と、前年、平年を大きく上回る漁獲があった。

オアカムロは94トンで、前年比10.7倍、平年比3倍と前年、平年を大きく上回る好調な漁獲であった。下半期に漁獲量が多く、8～12月に一月あたり10～20トンの漁獲があった。スルメイカは前年に引き続き低調で、前年比30%、平年比30%と、前年、平年を大きく下回った。マアジは平成29年も平年比14%と低調な漁獲が継続しているが、前年比1.5倍と前年を上回った。

表4 多獲された魚種の漁獲量

魚種	漁獲量 (トン)	前年比	平年比
さば類	713	0.6	0.7
ブリ	627	1.0	2.5
カタクチイワシ	418	1.5	1.1
ヤマトカマス	157	1.1	2.1
マイワシ	138	0.5	0.4
イサキ	111	2.9	2.0
オアカムロ	94	10.7	3.0
マアジ	83	1.5	0.1
マルソウダ	65	0.3	0.2
スルメイカ	54	0.3	0.3

静岡県水産技術研究所のホームページ

パソコンからは…… <http://fish-exp.pref.shizuoka.jp/>

携帯電話からは…… <http://fish-exp.pref.shizuoka.jp/mobile/>

右のQRコードをご利用ください。人工衛星NOAAの海面水温分布画像と関東・東海海況速報を見ることができます。

